

# この十年、次の十年

坂口博

創刊号から「原爆文学」探査」なる連載を引き受けさせられたのは、どういう経緯だったか。十年も経てば、ほとんど忘れていた。「書け」と言い出したのは花田俊典だろう。

特に「原爆文学」を専攻しているわけではない。未読の著名な作品も数多い。「原爆文学」を広く見渡せる立場にもいない。なのに書き続けたのは、そうでもないかと一年に一作品も読まないし、研究会との関わりも薄れていくと感じたからだった。

当初に立てた方針は、「原爆文学」として、そうした作家として、受容されていない作品／作家を取り上げるといふ一点のみ。具体的には、既存の原爆関係の文学全集類に収録されていない、水田九八二郎『原爆文献を読む——原爆関係書2176冊』（中央公論社、97・7 中公文庫版）に掲載されていない作品とした。

この十年で取り上げた十作品を順に並べれば、井上靖『城砦』・千田夏光『終焉の姉妹』・原之夫『ふたつの街』・丸元淑生『秋月へ』・山福康政『焼け跡に風が吹く』・南里征典『獅子は闇にて涙を流す』・中村真一郎／福永武彦／堀田善衛『発光妖精とモスラ』・城山三郎『大義の末』・上野英信『黒い朝』・火野葦平『革命前後』である。何ら、作品や作家に一貫性はない。その年、その年の思いつきや、たまたま出会った作品を取り上げたようなものだ。

井上靖『城砦』のなかに被爆した女性が出てくることは滝沢克己の文章で知った。千田夏光は、従軍慰安婦関係で読み進めてきた。原之夫の作品は、小林孝吉の評論集で知る。丸元淑生・山福康政・福永武彦・上野英信・火野葦平は、福岡県ゆかりの作家でもあるし、好きな作家なので、全作品を読み進めていた。同じく福岡出身であっても、さすがに南里征典までは手を出していなかったが、何かのきっかけで数冊を読んだ。城山三郎も、佐木隆三と同じく広島「きのご雲」を、遠方から目撃したことを知り、それを描いた「生命の歌」から『大義の末』に進んだ。いささか福岡・九州の作家に偏したのは、筆者の居住地（福岡県）からして許していただきたい。長崎は当初の三篇、あと広島が五篇、どちらでもない二篇（『獅子は闇にて涙を流す』・『発光妖精とモスラ』）が、十篇の内訳となる。

振り返れば、一九四五年八月の原爆投下以後、日本の文学において、どのような領域においても、原爆が課題となる可能性があることを、相互のつながりのなさによって最低限は示し得たのではなかるうか。さらに探れば、もつともつとあるに違いないが、こうした作業は、十回が限度である。とても、あとを続けていく勇氣はない。キリのいい今号で完結とするが、「探査」とは違った視点・方法での、新たな方の連載に期待したい。

次の十年、この研究会でかかえた独自の主題「B29空襲」から空襲一般を通して見えてくるものを、可視的なものとする作業が残されている。いつものこと、何に対してもそうなのだが、誰もしそうにないので、自分でするほかはない。進めていけば、そのうち同好の士（同志）も出現するだろう。

ここまで、付き合っていたいただいた読者に感謝します。